山下 慎司 さん（35歳）

やました しんじ／三松出身

東京都公立学校教員として10年間勤務した後、昨年4月にJICA（国際協力機構）の青年海外協力隊に入隊。新型コロナウイルスの感染拡大による一時帰国の時間を利用して、三松地区で「ポレポレ学習教室」を開講した。趣味はサッカーの審判。

昨日より今日、今日より明日へ、自分をもっと高めていきたい

南アフリカ共和国へ赴任 突然の一時帰国

「地元（三松地区）の子どもたちはすごく純粋でいいなと思います。だからこそ色々な刺激を受けて成長してほしい」。

そう話すのは、三松地区の小学生から高校生を対象とした期間限定の無料学習教室「ポレポレ学習教室」を主催する山下慎司（やましたしんじ）さん。

東京都の現役高校教員（数学）でもある山下さんは、今年の3月までJICA（ジャイカ）（国際協力機構）の青年海外協力隊の一員として、南アフリカ共和国へ赴任していた経歴を持つ。

「中学生の頃から、海外で仕事をしてみたいという漠然とした気持ちはありました」。

教員になって10年が経った節目に、現職教員のまま参加できる制度を利用して協力隊に入隊。70日間の訓練期間を経て、昨年7月に南アフリカ共和国の学校へ赴任した。

しかし、今年3月、新型コロナウイルス感染症拡大により、JICAから協力隊員全員の一時帰国が伝えられたことで状況が一変。

任期を残しての突然の帰国に「仕方ない」と覚悟を決めつつも、当時南アフリカ共和国内よりも感染が拡大していた日本へ帰国することに戸惑いを覚えた。生徒たちに別れを伝えることはできたが、帰国を伝えられた3日後には出国するという慌ただしさだった。

▲南アフリカ共和国では、日本の中学2・3年生に当たる生徒の数学教育を担当

ポレポレ（ゆっくり）と落ち着いて学べる空間を

山下さんは3月下旬に日本に帰国後、2週間の自粛期間を経て、4月上旬に小林に帰郷した。

現在は、8月2日までの待機期間中で、再び南アフリカ共和国へ赴任できるかは不透明な状況だ。山下さんは現職の高校教員でもあるため、再派遣ができない場合は速やかに東京の所属校に復職することになる。

先行きの見えない状況ではあったが、「なにかの形で学校や子どもたちと関わらないといけない」という使命感から、山下さんは帰郷後すぐに行動を開始。

関係者との話し合いや地域住民の協力もあり、自身の地元である三松地区で「ポレポレ学習教室」を開催することになった。

学習教室は、新型コロナウイルス感染症拡大による休校などにより学習内容の定着に不安がある子どもたちを支援する目的で、8月上旬まで毎週3回（月・水・金）開催している。

「高校生が中学生を、中学生が小学生を教える。それを大人が見守るという状況が、ポレポレ学習教室が目指す究極の到達点だと思っています」。

子どもたちに学校の先生以外にも身近に頼れる先輩がいるんだと知ってほしい。そして、地域の大人たちが子どもたちのつながりを見守っていく。そのきっかけになってほしいと開いたのが「ポレポレ学習教室」だった。

行動力を支えるポリシーと人生観

自分の強みは行動力だと話す山下さん。行動の根底には「人に喜ばれる生き方をするために、自分にできることをする」というポリシーがある。

「自分の利益ばかり考えていても、周りの人は誰も助けてくれない。特に今は、新型コロナウイルスの影響でみんなが大変な思いをしています。苦しい時にどれだけみんなで助け合えるかが大切だと思います」。

今、山下さんの行動が共感を呼び、大雨の際に送迎を申し出てくれる保護者や、子どもたちの見守りを申し出てくれる地域の人が増えるなど、少しずつ応援の輪が広がっている。

山下さんの行動力を支えるもう一つの源は、その人生観だ。

「人生の最期にどれだけ自分を最高の状態にもっていけるか。昨日より今日、今日より明日へ、自分をもっと高めていきたい。行動を起こしたことで成長できた、色々なことを知ることができた、それが明日の自分につながっていくと思っています」。

いずれは小林に帰ってきて、地元のために力を尽くしたいという想いも語る山下さん。先の見えない状況でも、自分の進む道をまっすぐ見つめていた。

㊤一緒にゴミ拾いに参加した生徒 ㊦大家さん一家
下宿先で近所の子どもたちにテスト勉強を教えることもあった。その経験が学習教室につながっている

▲取材日（6月12日）は小学3年生から高校3年生までの幅広い学年の子どもたちが集まった。教室名の由来になったスワヒリ語の「ポレポレ（ゆっくり）」の名前のとおり、子どもたち一人ひとりがのびのびと自分のペースで学べる教室を目指している